ここに卒業論文のタイトルを書く

20??年1月

岐阜大学 地域科学部

学籍番号　??????????

あなたの氏名を書く

目　次

序論 1

第1章　章の表題を書く 2

　第1節　節の小見出しを書く 2

　第2節　節の小見出しを書く ?

　第3節　節の小見出しを書く ??

第2章　章の表題を書く ??

　第1節　節の小見出しを書く ??

　第2節　節の小見出しを書く ??

　第3節　節の小見出しを書く

第3章　章の表題を書く ??

　第1節　節の小見出しを書く ??

　第2節　節の小見出しを書く ??

　第3節　節の小見出しを書く ??

結論 ??

参考資料リスト ??

序論

　ここに序論の文章を書く。卒業論文の構成は、原則的には「序論、第1章、第2章、第3章、結論」という形をとるものとする。「序論」とか「結論」というような言葉遣いに違和感を覚える場合は、「はじめに」「おわりに」などの言葉を使ってもよい。

　各章には必ず標題を付けること。つまり「第1章」だけではなく、たとえば「第1章　『生きている実感』とは何か」といったタイトルを付けること。序論や結論に標題は必要ないが、もちろん付けてもよい。

　「章」の下位区分として「節」を設けてもよい。ただしその場合、それぞれの節に標題を付け、たとえば、「第1節　失われた『生の実感』」というように小見出しを作ること。「節」という言葉遣いに違和感を覚える場合は、たとえば「1　失われた『生の実感』」といった処理をしてもよい。

　文献から長めの文章を引用するときは、前後各1行ずつあけ、かつ、左側を全角で2字分字下げして、引用であることを明示すること。引用部分をカギカッコ「　」で囲むことはしない。ここで言う「長めの文章」とは、このテンプレートの書式で、4行以上の長さの文章である。長い引用の場合、文献注を入れる位置は、引用の最後の句点（。）の直後、というのが慣例である。たとえば、山田登世子『ブランドの世紀』（マガジンハウス、2000年）の65ページから長い引用を行う場合は、以下のように全角２字分字下げする。

ブランド品の歴史的コンテキストは――エルメスがその典型であるように――結局のところ、顧客としての貴族の存在につきている。ところが大量消費社会ニッポンは、そんな歴史的なオリジン（根拠・起源）から切れたところでヨーロッパ・ブランドに接しているといわざるをえない。わたしたちにとって、ブランド品のオーラは、もはやモデルとしての貴族などとはほど遠いものなのだ。（山田 2000: 65）

　本文で引用した資料は必ず「参考資料リスト」に載せること。たとえば上の引用を行った場合、「参考資料リスト」には「山田登世子、2000、『ブランドの世紀』マガジンハウス。」のように記載する。

　序論が終わったら、改ページして第1章を始める。

第1章　章の表題を書く

第1節　節の小見出しを書く

　ここに第1章第1節の文章を書く。各章には必ず標題を付けること。つまり「第1章」だけではなく、たとえば「第1章　『生きている実感』とは何か」といったタイトルを付けること。序論や結論に標題は必要ないが、もちろん付けてもよい。

　「章」の下位区分として「節」を設けてもよい。ただしその場合、それぞれの節に標題を付け、たとえば、「第1節　失われた『生の実感』」というように小見出しを作ること。「節」という言葉遣いに違和感を覚える場合は、たとえば「1　失われた『生の実感』」といった処理をしてもよい。

　文献から長めの文章を引用するときは、前後各1行ずつあけ、かつ、左側を全角で2字分字下げして、引用であることを明示すること。引用部分をカギカッコ「　」で囲むことはしない。ここで言う「長めの文章」とは、このテンプレートの書式で、4行以上の長さの文章である。長い引用の場合、文献注を入れる位置は、引用の最後の句点（。）の直後、というのが慣例である。たとえば、山田登世子『ブランドの世紀』（マガジンハウス、2000年）の65ページから長い引用を行う場合は、以下のように全角２字分字下げする。

ブランド品の歴史的コンテキストは――エルメスがその典型であるように――結局のところ、顧客としての貴族の存在につきている。ところが大量消費社会ニッポンは、そんな歴史的なオリジン（根拠・起源）から切れたところでヨーロッパ・ブランドに接しているといわざるをえない。わたしたちにとって、ブランド品のオーラは、もはやモデルとしての貴族などとはほど遠いものなのだ。（山田 2000: 65）

　本文で引用した資料は必ず「参考資料リスト」に載せること。たとえば上の引用を行った場合、「参考資料リスト」には「山田登世子、2000、『ブランドの世紀』マガジンハウス。」のように記載する。

第2節　節の小見出しを書く

　ここに第1章第2節の文章を書く。

第3節　節の小見出しを書く

　ここに第1章第3節の文章を書く。第1章が終わったら、改ページして第2章を始める。

第2章　章の表題を書く

第1節　節の小見出しを書く

　ここに第2章第1節の文章を書く。各章には必ず標題を付けること。つまり「第2章」だけではなく、たとえば「第2章　『生きている実感』とは何か」といったタイトルを付けること。序論や結論に標題は必要ないが、もちろん付けてもよい。

　「章」の下位区分として「節」を設けてもよい。ただしその場合、それぞれの節に標題を付け、たとえば、「第1節　失われた『生の実感』」というように小見出しを作ること。「節」という言葉遣いに違和感を覚える場合は、たとえば「1　失われた『生の実感』」といった処理をしてもよい。

　文献から長めの文章を引用するときは、前後各1行ずつあけ、かつ、左側を全角で2字分字下げして、引用であることを明示すること。引用部分をカギカッコ「　」で囲むことはしない。ここで言う「長めの文章」とは、このテンプレートの書式で、4行以上の長さの文章である。長い引用の場合、文献注を入れる位置は、引用の最後の句点（。）の直後、というのが慣例である。たとえば、山田登世子『ブランドの世紀』（マガジンハウス、2000年）の65ページから長い引用を行う場合は、以下のように全角２字分字下げする。

ブランド品の歴史的コンテキストは――エルメスがその典型であるように――結局のところ、顧客としての貴族の存在につきている。ところが大量消費社会ニッポンは、そんな歴史的なオリジン（根拠・起源）から切れたところでヨーロッパ・ブランドに接しているといわざるをえない。わたしたちにとって、ブランド品のオーラは、もはやモデルとしての貴族などとはほど遠いものなのだ。（山田 2000: 65）

　本文で引用した資料は必ず「参考資料リスト」に載せること。たとえば上の引用を行った場合、「参考資料リスト」には「山田登世子、2000、『ブランドの世紀』マガジンハウス。」のように記載する。

第2節　節の小見出しを書く

　ここに第2章第2節の文章を書く。

第3節　節の小見出しを書く

　ここに第2章第3節の文章を書く。第2章が終わったら、改ページして第3章を始める。

第3章　章の表題を書く

第1節　節の小見出しを書く

　ここに第3章第1節の文章を書く。各章には必ず標題を付けること。つまり「第3章」だけではなく、たとえば「第3章　『生きている実感』とは何か」といったタイトルを付けること。序論や結論に標題は必要ないが、もちろん付けてもよい。

　「章」の下位区分として「節」を設けてもよい。ただしその場合、それぞれの節に標題を付け、たとえば、「第1節　失われた『生の実感』」というように小見出しを作ること。「節」という言葉遣いに違和感を覚える場合は、たとえば「1　失われた『生の実感』」といった処理をしてもよい。

　文献から長めの文章を引用するときは、前後各1行ずつあけ、かつ、左側を全角で2字分字下げして、引用であることを明示すること。引用部分をカギカッコ「　」で囲むことはしない。ここで言う「長めの文章」とは、このテンプレートの書式で、4行以上の長さの文章である。長い引用の場合、文献注を入れる位置は、引用の最後の句点（。）の直後、というのが慣例である。たとえば、山田登世子『ブランドの世紀』（マガジンハウス、2000年）の65ページから長い引用を行う場合は、以下のように全角２字分字下げする。

ブランド品の歴史的コンテキストは――エルメスがその典型であるように――結局のところ、顧客としての貴族の存在につきている。ところが大量消費社会ニッポンは、そんな歴史的なオリジン（根拠・起源）から切れたところでヨーロッパ・ブランドに接しているといわざるをえない。わたしたちにとって、ブランド品のオーラは、もはやモデルとしての貴族などとはほど遠いものなのだ。（山田 2000: 65）

　本文で引用した資料は必ず「参考資料リスト」に載せること。たとえば上の引用を行った場合、「参考資料リスト」には「山田登世子、2000、『ブランドの世紀』マガジンハウス。」のように記載する。

第2節　節の小見出しを書く

　ここに第3章第2節の文章を書く。

第3節　節の小見出しを書く

　ここに第3章第3節の文章を書く。第3章が終わったら、改ページして結論を書く。

結論

　ここに結論の文章を書く。文献から長めの文章を引用するときは、前後各1行ずつあけ、かつ、左側を全角で2字分字下げして、引用であることを明示すること。引用部分をカギカッコ「　」で囲むことはしない。ここで言う「長めの文章」とは、このテンプレートの書式で、4行以上の長さの文章である。長い引用の場合、文献注を入れる位置は、引用の最後の句点（。）の直後、というのが慣例である。たとえば、山田登世子『ブランドの世紀』（マガジンハウス、2000年）の65ページから長い引用を行う場合は、以下のように全角２字分字下げする。

ブランド品の歴史的コンテキストは――エルメスがその典型であるように――結局のところ、顧客としての貴族の存在につきている。ところが大量消費社会ニッポンは、そんな歴史的なオリジン（根拠・起源）から切れたところでヨーロッパ・ブランドに接しているといわざるをえない。わたしたちにとって、ブランド品のオーラは、もはやモデルとしての貴族などとはほど遠いものなのだ。（山田 2000: 65）

　本文で引用した資料は必ず「参考資料リスト」に載せること。たとえば上の引用を行った場合、「参考資料リスト」には「山田登世子、2000、『ブランドの世紀』マガジンハウス。」のように記載する。

　結論が終わったら、改ページして参考資料リストを書く。

参考資料リスト【以下は仮のリスト。自分の資料に合わせて書き換えること。】

浅利慶太（台本・演出）、1991、『ミュージカル 李香蘭』（作曲: 三木たかし）劇団四季。

荒俣宏、2000、『NHK人間講座 パリ・奇想の20世紀』日本放送出版協会。

市川崑（監督）、1961、『黒い十人の女』（脚本: 和田夏十）大映。

井上雄彦、1991-6、『SLAMDUNK』（全31巻）集英社。

井上雄彦、1998-、『VAGABOND』（現在18巻、刊行中）講談社。

（「いまなぜ宮本武蔵か」）、2000、「マンガ『バガボンド』600万部メガヒット　いまなぜ宮本武蔵か」『週刊朝日』朝日新聞社、105(16)[4月7日号]: 42-4。

内田樹、2011、「コピペはダメだよ、について」『内田樹の研究室』2011年1月9日（2022年6月3日取得, http://blog.tatsuru.com/2011/01/09\_1554.html）。

神山重彦、2021、「のぞき見」『物語要素事典』（2022年6月3日取得, https://www.lib.agu.ac.jp/yousojiten/）。

樹林ゆう子、1999、「ブックオフ 素人商法が生んだ成長」『AERA』朝日出版社、12(37)[9月13日号]: 26-7。

ポール・ドゥ・ゲイほか著、暮沢剛巳訳、2000、『実践カルチュラル・スタディーズ——ソニー・ウォークマンの戦略』大修館書店（原著1997）。

河野真太郎、2021、「笑うべきか泣くべきか、それが問題だ　土曜ドラマ『今ここにある危機とぼくの好感度について』」『NHK\_PR』NHK、2021年5月22日（2022年6月3日取得, https://www6.nhk.or.jp/nhkpr/post/original.html?i=29226）。

瀬尾光世（脚本・演出）、1945、『桃太郎 海の神兵』（音楽: 古関裕而）松竹動画研究所（松竹ホームビデオ、VHS）。

高山宏、「道化」『コトバンク』［日本大百科全書］（2022年6月3日取得）。

戸田奈津子（字幕翻訳）、1998、『恋におちたシェイクスピア』（監督: ジョン・マッデン）Miramax Film Corp. and Universal Studios（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント、DVD）。

中野美代子、1997、「漢字の神話学——文字空間としての」柳瀬尚紀編『日本の名随筆 別巻74 辞書』作品社、94-104（原著 1986）。

(「2000年代」)、2018、「2000年代のセールスランキングトップは？　『遙か』『コルダ』に『ときメモGS』――乙女ゲームの歴史をNo.1とOnly Oneでプレイバック【乙女ゲームLabo】」『ビーズログ.com』KADOKAWA Game Linkage、2018年4月23日(2022年6月3日取得, https://www.bs-log.com/20180423\_1282020/)。

野田昌宏（出演）、1998、「日本SFの黎明期」『NHK人間大学 宇宙を空想してきた人々』NHK教育テレビ、1998年9月10日。

野谷文昭(講義）、2019、「第01回 スペイン」『ヨーロッパ文学の読み方―近代篇』放送大学、2019年度開講（2022年6月3日取得, https://v.ouj.ac.jp/view/ouj/#/navi/player?co=10523&ct=V&ca=1220）。

花田達朗・吉見俊哉・コリン・スパークス編、1999、『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社。

原民喜、1995、『ガリバー旅行記』講談社［文芸文庫］（原著 1951）。

ビーチ・ボーイズ、1966、「駄目な僕」（作詞: トニー・エイシャー、作曲: ブライアン・ウィルソン）『ペット・サウンズ』東芝EMI（CD）。

平田オリザ、1998、『演劇入門』講談社［現代新書］。

ファットボーイ・スリム、1998、「ギャングスター・トリッピング」『ロングウェイ・ベイビー!!』ソニー・ミュージックエンタテインメント（CD）。

ピエール・ブルデュー著、石井洋二郎訳、1990、『ディスタンクシオンⅠ』藤原書店（原著1979）。

フジ子・ヘミング（ピアノ演奏）、2000、「月の光」（ドビュッシー作曲）『憂愁のノクターン』ビクター エンタテインメント（CD）。

村上信明・松本正・星野渉、1999、「街の書店はオンライン書店と共闘せよ」『季刊・本とコンピュータ』トランスアート、10[1999年秋号]: 151-61。

村上龍、1997、『ラブ＆ポップ ——トパーズ II 』幻冬舎［文庫］（原著 1996）。

山田登世子、2000、『ブランドの世紀』マガジンハウス。

吉見俊哉、1994、『メディア時代の文化社会学』新曜社。

————、1995、『「声」の資本主義——電話・ラジオ・蓄音機の社会史』講談社。

————、1996、「社会学の25人（6）吉見俊哉」（インタビュー記事）『AERA Mook 社会学がわかる。』朝日新聞社、20-1。

————・水越伸、1997、『メディア論』放送大学教育振興会。

笠智衆（主演）、1953、『東京物語』（監督: 小津安二郎） 松竹大船（松竹ホームビデオ、VHS）。

レディー・ガガ、2011、「ボーン・ディス・ウェイ」『ボーン・ディス・ウェイ』ユニバーサル・ミュージック（音楽配信）。

フランク・レントリッキア、トマス・マクローリン編、大橋洋一ほか訳、1994、『現代批評理論——22の基本概念』平凡社（原著 1990）。

イアン・ワット著、藤田永祐訳、1999、『小説の勃興』南雲堂（原著 1957）。

Broadbent, Jeffrey, 1998, E*nvironmental Politics in Japan: Networks of Power and Protest*, New York: Cambridge University Press.

Douglas, Jack ed., 1970, *Understanding Everyday Life*, Chicago: Aldine.